児童養護施設「岡山聖園子供の家」（岡山市北区天神町）と、ロシアの侵攻を受けるウクライナ南部・オデーサ市の子どもたちの間で、詩を通じた交流が芽生えている。つないだのは、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の「創造都市ネットワーク文学分野」に加盟する両市の担当者ら。子供の家で暮らす小学生９人の詩10編が今春、オデーサ市の地元紙に掲載され、現地の少年から共感のメッセージが届き、戦争や虐待などで傷ついた心を寄せ合っている。（山内悠記子）＝21面に関連記事

岡山・児童養護施設 小学生の詩

ウクライナ少年から反響

ユネスコ会議縁、地元紙掲載

「前進しなくては」

〈どうぶつになまえをつけたことがあるよ。（中略）のらねこに（中略）5歳のころに、50匹くらいつけたんだ。（中略）もし今出会ったら、きっとわかる。（中略）めちゃ、時計の針の音がする〉（H）

掲載詩は、岡山市が文学分野に加盟した2023年度からノートルダム清心女子大（同市）と続ける「文学と福祉をつなぐ試み」協働事業で生まれた。

事業は村中李衣・元教授(67)や日下紀子教授、学生らが月2回、子供の家で希望する約15人に合う絵本を選び抜き、対話を重ねる。物語を深く受け止め、自分の言葉で自由に表現する「読みあい」が特長。3年目の25年度は、教授陣が向き合い作詩に挑んだ。

当初はつらい経験から大人と個室で相対することに不安を抱き、絵本に集中できず歩き回る子もいた。しかし、岡山県児童養護施設等協議会長の則武直美園長は「高い専門性と愛情ある大人との自由で楽しい時間に触れ、自信を持って自己表現し目を輝かせるようになった」と振り返る。

岡山市が昨秋、スロベニアで開かれた文学分野都市の国際会議でこの事業を発表した際、オデーサ事務所長のマヤ・ディメルリさんが共感。依頼を受けた村中さんが昨年末、10編の詩を送り、今年4月23日付の地元紙「イブニング・オデーサ」で事業と共に紹介された。

私立中高一貫校の生徒で詩を知ったダニロ・パブリュクさんは命の危険に日夜さらされながらもすぐにメッセージを届けた。グラフィックのイラスト付きで「時計の針の音の表現に驚いた。時間は進み続けるので、強くあり続け、前に進まなくてはという意味に感じられる」などと記載。5月3日に受け取った子どもたちは「私たちに何ができるの」と口々に訴え、パブリュクさんの身を心配して泣く子もいた。

掲載紙も20日に届き、作詩者の小学5年女子(10)は「お母さんと暮らしていた時、野良猫に名前をつけたのを懐かしく思い出した。新聞に載ったのはすごいけど、ウクライナと日本の皆が普通に会える日が早く来てほしい」と願った。詩はウクライナ全土の子どもの年刊詩集に収録され、今年中に発刊予定だ。

ディメルリさんは「文学でミサイルを止めることはできないが、尊厳や思いやりなど大切な何かを守る連帯を生み出せる。両市の子どもが内面から発する言葉は恐怖を超えて旅し、新たな文化友好交流の形を創っている」と評し、村中さんは「厳しい時代に文学との出会いが悲しみの中の光となり、互いの命を思いやり共に生きる力を育んでいる」と話す。

自分たちの詩が掲載されたオデーサ市の地元紙に見入る子ども（手前）ら＝5月中旬、岡山聖園子供の家

村中元教授（右から2人目）と絵本の読みあいを楽しむ子どもたち

ズーム

ユネスコの「創造都市ネットワーク」　建築やデザイン、音楽など8分野に世界408都市、日本では金沢、名古屋など12市が加盟する（昨年10月末現在）。岡山市は、子どもの幸せと平和を願った児童文学作家・坪田譲治（1890～1982年）の顕彰活動が評価され2023年、文学分野に国内で唯一認定された。加盟都市は「創造性を持続可能な都市開発の戦略的要素」と位置づけ、国際会議を通じて官民連携の優良事例を共有し、まちづくりに取り組む。